

ハワイにおける沖縄救済衣類運動について

木谷 彰 宏

I. はじめに

本稿¹では、沖縄戦によって灰燼に帰し、社会や生活の基盤が破壊されて困窮する沖縄の窮状を救うため、救済活動の嚆矢となったハワイでの救済衣類運動についてみていく。

まず、救済衣類運動までのハワイにおける沖縄県系人の歴史を振り返っておこう。

ハワイの沖縄県系人²は「遅れてきた移民」である。沖縄からの最初の移民がハワイに上陸した1900年当時、日本からのハワイ移民はすでに6万人以上に達し、ハワイの人口の四割弱を占めていた³。「遅れてきた移民」たちを待ち受けていたのは、農場での過酷な労働と、言語や豚を食べるなどの文化的な違いに起因する差別的なまなざしであった⁴。しかし、これらのことがかえって沖縄県系人同士の結束を高め、相互扶助のための村や字ごとの同郷団体の結成につながっていく⁵。

農場での労働は過酷ではあったが、海外への送金も可能になるだけの月給を得られるものであった⁶。移民の海外送金の中で最も多かったのはハワイからの送金で、それは沖縄県の経済を支えていた⁷。沖縄県系人は少ない資本金で、しかも自らの技術を生かせる分野—養豚業を筆頭に、食品加工・卸売・販売業、レストラン業—に進出するようになる⁸。これらの産業はハワイに駐留するアメリカ軍にとっても、食料を支える観点から重要なものとなっていった⁹。このようにして沖縄県系人はハワイ社会の中で、次第に社会的・経済的地位を向上させていくことになる。

太平洋戦争が勃発すると、ハワイでは戒厳令が発令された。日系人の行動は統制下に置かれ、敵性外国人とみなされた者は強制収容された。ただ、その数はアメリカ本土の日系人に比べて少なく、ハワイの日系人の中でも沖縄県系人の指導者で収容される者は比較的少なかった¹⁰。開戦して1年余りが過ぎたころになると、日系人の生活は戦前と変わらない状態に戻っていた¹¹という。それは、沖縄で皇国臣民としての教育を受けてきた移民一世が、その内心を外に向けて表現し

なかったからでもある¹²。一方、移民二世に対しては、アメリカ軍への忠誠を誓約するか否かが問われることになった。忠誠を拒否した者は「ノーノーボーイ」¹³と呼ばれ、抑留所に送られた。二世の中でもアメリカで生まれ日本で育った帰米二世は、「戦場に行く」のか、「抑留所に送られる」のかの間で苦悩する。後に語学兵として沖縄戦に従軍した比嘉武二郎のように、抑留所に入れられることを忌避するために志願した者¹⁴もいた。

太平洋戦争終結後、ハワイでは救済衣類を送るための委員会（1945年11月29日発足）を立ち上げる動きが進んでいた。その頃、日本国内では沖縄県出身者が沖縄人連盟を結成し、GHQに対して、戦争によって悲惨な境遇に陥った沖縄の人々が直面する困難に対応を求める嘆願書¹⁵を提出している。そこには、「最モ悲惨ナ境遇ニ陥レラレタルモノハ沖縄人デアリマス。然ルニ日本政府ハ沖縄人ノ直面スル困難ニ関シテ甚ダ冷淡デアリ、吾々ハ最早コノ無力ナ政府ヲ信賴スルコトガ出来ヌ…」とあり、沖縄の窮状に対する救いの手が差しのべられていない状況であったことがわかる。そのような現状の中、海外の沖縄移民の中から沖縄の窮状を救済しようという声があがり、沖縄救済¹⁶のための運動が展開されていく。その動きが最も早かったのがハワイ¹⁷での救済衣類運動であった。

ハワイではこの救済衣類運動に続いて、1950年にかけて様々な団体が組織され、野菜種子・漁具・学用品・薬品・優良種豚・山羊の輸送や大学建設提唱と留学生招聘、医療救済など沖縄救済のための活動が進められていった。救済衣類運動を含め、これらの一連の沖縄救済運動については、島田法子の研究¹⁸に詳述されている。ただ、これまでの研究では、救済衣類運動を他の救済運動と並列的、一括りに捉えており、アイデンティティだけでは語りきれない、社会的カテゴリーを超えた横断的な運動としての、救済衣類運動のもつ意味が必ずしも浮き彫りにされたわけではない。

そこで本稿では、沖縄からの移民がいる国や地域の中で、なぜ一早くハワイで救済衣類運動が始まったのか、なぜ短期間に多くの救済衣類を集めることができたのか、何が人々の自発性を喚起し、運動推進の原動力となったのか、この運動が後の救済運動にどのような影響を与えたのかについて、社会運動論的な観点も踏まえながら考えていきたい。

そのために、Ⅱ章以降、次のように叙述を進めていく。まず、Ⅱ章では、救済運動に関わった人々が残した記録や、当時の新聞記事等からその経緯を明らかにする。その上でⅢ章・Ⅳ章では、なぜ救済運動が広がりをもせたのかを、移民二世の比嘉太郎の活動を通して考えていく。さらにⅤ章では、救済衣類運動がその後の救済運動にどのようにつながっていったのかについても検討していく。

II. 沖縄救済衣類運動の経緯

まず、救済衣類運動委員会が発足するまでの経過を、この運動に関わった安里貞雄の記録¹⁹から辿っていく。

1945年9月16日、比嘉太郎²⁰はハワイの安里貞雄宅に招かれ、出席した沖縄県人実業家らに対して、沖縄の戦況の報告講演を行った。その講演のなかで、比嘉は、「食料は辛うじて補給されているが、衣類は着のみ着のまま寒さに震えている」と、戦災民の実状を報告して、布哇からの救済の必要性をアピールしたという。この訴えを聞いた出席者は、ただちに救済会のような団体を組織するための委員の任命を提案した。

沖縄戦災民の窮状を救おうという声は各方面にひろがり、多数の家庭や宗教団体等では救済運動の開始を予期し、衣類募集に着手したところもあった。しかし一方で、こうした動きに対する反発もあった。

例えば、比嘉太郎が、沖縄から帰布後の9月18日、県人約20人が参加した初めての会合で沖縄の惨状を報告した際、県人の有力者から「ハワイに住んでいる沖縄県人が、沖縄救済という運動を起こすことはハワイに住んでいるわれら沖縄系人の将来のために好ましくないことである。…沖縄救済など、個人個人は別として一般に呼びかけるなどもっての外である」と真っ向から反対され、同調者も二、三人現われた²¹という。県系人の有力者の中に、「勝ち組」に与して救済運動に反対や抵抗する人たちがいるという現実、県系人だけで運動を進めていくことが難しいことを示していた。

しかも運動の推進への懸念は他にもあった。それは、以下の2点である²²。一つは、救済運動といっても、ハワイで外国人と見なされている沖縄県系人が運動を起こすことが、日系人排斥の口実をハワイに住む米国人に与えてしまい、結果的に救済運動が日系人全体に不利益を招くことになるのではないかということ、もう一つは、たとえ救済品を募集したとしても、果たして米軍が輸送の許可を与えてくれるかどうかということであった。日本の勝利を疑わない「勝ち組」とそれに与する人々の存在、日系人排斥に対する不安、そして救済運動の実現に向けて、米軍側が協力してくれるかどうかといった、運動を展開するための障害をいかに乗り越えていくか。こうした懸念を前に、沖縄県系人有志は熟慮した末、宗教家の指導を仰ぐことにした。

ハワイの県系人有志の比嘉太郎、安里貞雄ら5人は、霜鳥武夫牧師と共にギルバート・ボールス博士を訪ねアドバイスを求めた(9月19日)。沖縄県系人有志は、ボールス博士らのつながりから、ホノルルコミュニティー・チエストの幹事アーサー・アイルス氏を紹介され、布哇信託会社建物内のアイルス氏のもとを訪

ねた。そこで彼らは、沖縄戦災民救済運動に対する意見を聞き、アイルス氏に援助を要請した。アイルス氏は、沖縄戦災民に対して大いに同情し、支援を約束してくれた(10月25日)。さらにアイルス氏は、沖縄から帰米の途上ハワイに滞在していた米国赤十字社代表のスイーツランド氏と、救済運動の方法の具体案を協議する機会を作ってくれた(11月2日)。その協議ののち、アイルス氏とスイーツランド氏は陸軍情報部長のフィルダー將軍を訪問し、救済運動着手の許可を得てくれた。その後、アイルス氏の事務所でボールス博士と沖縄県系人有志が集まり、ボールス博士の提案により、ホノルル教会連盟を通じて、当時沖縄輸送を管轄していた海軍に交渉することが決まった(11月7日)。こうしてハワイのキリスト教会や慈善団体の関係者のつながりを辿りながら、ようやく輸送を担う海軍関係者に行き着いたのであった。海軍側との交渉委員には、ボールス博士、ウィットモーア牧師、比嘉太郎が選ばれ、3人は、パールハーバーの海軍基地で、ゼニングス海軍大佐と交渉し、沖縄への救済物資輸送の許可を得たのである(11月26日)。ここに運動を進めていく上での障害の一つであった衣類輸送面の課題は解決をみたのだった。

11月27日、沖縄県各村臨時集会在マカレー本願寺で開かれ、約70名が参加した。ドクトル金城善助を議長に、玉代勢法雲、安里貞雄を書記として、慎重に協議した結果、直ちに衣類募集に着手することになった。集会には10数人の女性も参集し、すでに衣類を近所から集め、綺麗に箱に詰め、募集をするという発表を待ち望んでいるという報告があり、「熱誠に燃えた」大会になった²³という。

11月29日、委員長：リチャード博士、副委員長：ボールス博士、書記：ミルドレッド・トール嬢、会計：安里貞雄、委員：ローネ・ベル氏をはじめ13人からなる沖縄救済衣類運動委員会が発足した。メンバーには、ハワイの宗教関係者が数多く名を連ねていた。また、委員長のリチャード博士が病体であったため、運動の総指揮を執ったのはボールス博士であった。彼は、長きに渡りフィラデルフィア伝道会の一宣教師として日本での伝道活動に携わり、ハワイにおいても、不幸な境遇にある人たちの救済活動を行っていた²⁴。彼は、「現在苦しんでいる日本国民を見てどう思いますか」と問われたとき、「私がどんな気持ちをしているかは之からする私の仕事で表す限りです」²⁵と答えた。こうして、ハワイに住むアメリカ人の協力を得られたことで、救済運動の推進が日系人の不利益を招くことになるという懸念は払拭された。このように、救済衣類運動は、国籍や立場を越えた横断的な運動として展開していくことになる。

次に衣類募集・蒐集が如何に進められていったのか、その経過を邦字新聞の紙面から辿ってみたい。

委員会が発足した翌11月30日の新聞²⁶では、ハワイ内の教会を網羅するホノ

ルル教会連盟を主催者とし、ハワイに住む人々にアピールし、衣類募集を始めることを報じている。その記事ではさらに、「戦禍に泣く沖縄の被災民を救はう！と云う布哇在住の沖縄県人の涙ぐましき同胞愛の熱意は、当地内外人の宗教家を動かし、海軍及び陸軍当局がこれに理解と協力を与へ沖縄への衣類の発送方を正式に許可するに至った」と、これまでの経緯を説明したうえで、海軍が沖縄への救済品輸送だけでなく、各蒐集所からの衣類を運搬するトラックの提供から沖縄での衣類の配給の監督に至るまで後援をしてくれること、どのような衣類も必要であるが、特に必要であるのは婦人、子供、乳児の衣類、衣類の他に、毛布、石鹸、歯磨楊子、タオルや洗濯した清潔な衣類などが必要であるというホノルル教会連盟長・ガイガー師の談を掲載している。また、この日の紙面では、寒い冬が迫っているので、第1期として、12月3日から17日の2週間、裁縫所をYMCA内の国際女子キリスト青年会に、蒐集所を市内各地に置き、2期以降の募集も予定していることを掲載している。

12月3日衣類募集が始まると、新聞は連日のように、募集に関する記事や広告を掲載するようになる。運動に関する日邦紙『Hawaii Times』に掲載された記事の見出しを抜き出してみると、次のようになる（以下、「見出し」（掲載日）の順に記載）。

「沖縄戦災民救済 衣類募集はけふ開始 中央集積場は本願寺別院 沖縄県人二世も募集運動参加」（12月3日、6面）、「沖縄戦災民救済運動 沖縄県人の血を享けた我等二世青年達による広告」（12月3日、6面）、「沖縄戦災民衣類募集 米国海軍が後援 一般県民の同情ある援助を懇請 婦人奉仕会の後援 モイリリ日語で裁縫」（12月4日、6面）、「沖縄戦災民救済に 救世軍の活動 涙ぐましい婦人達の奉仕」（12月6日、10面）、「加哇でも衣類募集 各教会で運動開始」（12月7日、7面）、「沖縄戦災民への衣類蒐集所 オアフに52ヶ所 内外汽船は無料で運送」（12月8日、8面）、「300,000人戦災民は救われつつあります」（12月12日、5面）、「戦災民への救済衣類 海軍より積取り開始 蒐集運動各地で白熱化 人手の奉仕 切に要求 箱類が欲しい」（12月12日、6面）、「人類愛の発露！ 300,000人を救う時は今！」（12月13日、6面）、「救ひませう寒さから」（12月13日、9面）、「裏オアフの沖縄救済 衣類蒐集は好成績」（12月14日、6面）、「沖縄戦災民救済運動 あと僅か2日 どしどし恵んで下さい さあ、最後の一押しです」（12月15日、6面）、「衣類募集締切 23日延期す 再臨教会でも救援 衛生品や衣類寄付」（12月17日、5面）、「馬哇同胞熱誠 沖縄戦災民救済衣類発送」（12月18日、6面）。

蒐集期限（17日）後になると、「同情はなお続く 沖縄救済衣類 整理に奉仕者入要」（1946年1月7日、10面）とあるように、蒐集した衣類の整理が行われ、蒐集活動に関わった団体—「ワイパフ在住沖縄県人会」（12月18日、5面）、「オ

アフ島ワヒアワ在住沖縄県人会有志」(1946年1月5日、9面)、「オアフ島カイレア救済奉仕委員一同」(同年1月8日、6面)、「沖縄戦災民救済運動二世青年部」(同年1月12日、8面)、「ヒロの沖縄戦災民救済 大成功で終了 ヒロ沖縄戦災民救済会」(同年1月21日、8・9面)一の蒐集活動協力への謝辞が掲載されるようになる。

期間中、中央集積場であった慈光園を中心に、市内及び各プランテーション農場より集まった20万人分以上の694箱、布哇島より集まった(木箱及び購入品を除く)54箱、一部センターの三流品を整理した4箱の、計752箱(すでに積出されたもの574箱)であった。これらには、延べ1,800人の労働奉仕、ランドリー及び裁縫の特別奉仕、夜業者への食物飲料サービス、箱・広告費・蒐集所の提供、新品購入費の寄贈など、目に見えない幾多の真心がこもっていることが報告されている(沖縄戦災民救済運動二世青年部、同年1月12日、8面)。

ヒロでの活動の中心であった金城仁盛が、「何故会長及其の外の役員を白人をあげてあるかである、云うまでもなく当時未だ日本人だけに依って敵国沖なわを救済する事が白眼視されるおそれがあったからである、其の意味から志願兵を出したアメリカ市民である二世は或る程度の自由な気持でこの運動を助けてくれた」²⁷と蒐集活動を振り返っているように、ハワイの米国関係者が運動の推進役として先頭に立ったことで、沖縄県系人二世の活動も活発となり、救済運動はハワイ各島、各国人に幅広く展開していった。当初、この運動はハワイ在住の日本人全体に悪影響を及ぼすという懸念があったが、杞憂に終わったようである。衣類蒐集に関する新聞記事からは、衣類蒐集から運搬・荷造りに必要な労働、物品、それらにかかる様々な費用が、多くの人の協力によって賄われたことがわかる。

救済衣類運動をはじめ様々な救済運動に関わった仲嶺真助は、後年、衣類蒐集の「主な仕事は名もない人たちの仕事でした。…無料でランチを提供したレストランの主人、…実際に汗水垂らして働いた人たちは、名前の出ることなど望んでいないかもしれません。ただ一生懸命働き、そのことが郷土の助けになることに最大の喜びを抱くような人たちはばかりでした。今から思えば、ハワイの沖縄県人が本当の意味で一体となったのはあの時期でした。あのような熱気は後にも先にも経験したことがありません」²⁸と語っている。

衣類が詰まった木箱には、人類愛・隣人愛を掲げる宗教関係者・団体をはじめとする人々の献身的な奉仕と協力、沖縄県系人の記録に残らないが同胞を助けたいという思いや働きが詰まっていた。運び出されていく木箱は、沖縄県系人が心をついに展開した大運動の「ウチナーンチュ・ムーブメント」²⁹が結実した瞬間を告げていたともいえる。

Ⅲ. 比嘉太郎の救済運動への関わり

前章では、1945年9月以降、救済衣類運動が、ハワイの宗教関係者や組織の協力を得ながら進められていった経緯をみてきたが、その救済運動の推進に大きく関わっていたのが比嘉太郎である。そこで本章では、救済運動に関わる彼の活動を回顧録からみていきたい。

比嘉は、米軍が沖縄侵攻する段階から、沖縄救済に注力しようとしていたようだ。沖縄戦が始まるという報を聞いて、彼はすぐに沖縄行きを志願している³⁰。それには、彼が歩兵百大隊の一員として従軍したイタリア戦線での戦災民の惨状を見て、故郷沖縄の人たちに「そのような苦しみを味わいさせたくない」³¹と考えたからであった。

彼がイタリアで見た惨状は、いったいどのようなものであったのだろうか。「院内の兵士目当の売春婦がたむろし、…片言の英語で…『金がなければ煙草三袋でいいよ』」³²、「米兵が捨てた煙草の吸いがらを四、五人の大人の男が力まかせにうばいあっている。…兵士たちが残飯を捨てる。…力まかせの奪いあい。…野獣にも劣る姿を、いたるところで見せつけられた」³³と、ナポリの軍病院近くでみた光景を回想している。当時すでに戦火が遠ざかっていたナポリでこのような状況がみられた背景を、彼は「イタリア全土にわたった戦火は、彼等イタリア人を明日のパン、否今日のパンさえ不自由する飢えに追い込んだのである」³⁴と語っている。彼の目に映った、生きる糧を失くし、秩序と安寧を喪失したイタリア戦災民の姿は、沖縄戦によって今後現実になるかもしれない故郷沖縄の人たちの姿でもあった。そのような状況を避けたいという思いが、彼を救済運動へと駆り立てたのだ。

1945年4月20日、彼の沖縄行きを励ます小宴が、ハワイの真喜志康輝宅で開かれた。参加者は安里貞雄、豊平良金（当時『日布時事』のちの『ハワイタイムス』記者）らであった³⁵。話題は戦争によって難渋している沖縄の人たちに集中した。その場で豊平は、沖縄の民衆が、アフリカやイタリアの戦争被災者同様、悲惨をきわめるのは明らかで、沖縄を救済する必要があると述べ、参加者一同（参加していた婦人達も）から、「救援物資はハワイで募るので、比嘉氏には沖縄で救援物資の受け入れについて交渉し、それが可能になるように骨を折ってほしい」³⁶と依頼された。この段階で、沖縄救済運動の推進が決まり、比嘉は任地沖縄でその実現に向けて活動を進めていく。

比嘉は嘉手納基地に到着し（4月25日）、第10軍（沖縄戦の司令本部）情報部付きになり、ヌービー中尉、ブーム大佐らと寝起きを共にするようになった。比嘉によれば、この人たちと懇意になったことが沖縄救済の原動力になった³⁷という。ヌービー中尉とブーム大佐は、沖縄戦で目の当たりにした罹災民に、同情

と好意を示し、協力を約した。比嘉はブーム大佐から、米軍沖縄方面宗教部最高位の軍属牧師、ハイラー大佐を紹介され、バクナー中将与との面会が実現（5月2日）した³⁸。ハイラー大佐は、ハワイ同胞が、沖縄の人たちに対し救援を希望しているので、力添えをしてほしい旨を伝えると、バクナー中將は、米国赤十字社代表のスイーツランド氏との面会の機会をつくってくれた³⁹。その後、3度にわたって、ブーム大佐、ハイラー大佐、スイーツランド氏の4人で意見交換をし、5月30日、ブーム大佐は米国キリスト教連盟へ、スイーツランド氏は米国赤十字社へ、救援支援の依頼文書を発送することを約束した（両氏からは7月2日の意見交換時にすでに文書を発送したとの報告を受ける）⁴⁰。この約束が果たされたことを、帰布後、比嘉は知った。海軍が救援物資の輸送を約束した11月26日、比嘉はゼニングス大佐から、前日に赤十字社から沖縄向けの救援物資衣類がハワイを通過したこと、その数日前にハワイからも救援物資が発送され、その実現にハイラー大佐の働きかけがあったことを聞かされた⁴¹。

比嘉が見た沖縄は、イタリアの惨状をはるかに上回るひどい状態であった。帰布後の新聞には、比嘉の沖縄の戦災民の状況を報告した記事⁴²が掲載されている。そこでは、沖縄戦災民の置かれた状況を「砲煙に追われて慌てて避難したので皆着のみ着の儘のみすぼらしい姿をしている。やがて寒い冬きたりなば、その哀れは一層深刻化するであろう…早く慰問品が送れる道が開けて衣類を一枚でも多く送ってやりたいものである。衣類と共に…毎日朝起に使う歯磨粉、歯ブラシ、顔を洗う石鹸、そんな生活必需品がないのだ。せめて婦人の方だけでもこの必需品を寄贈したら哀れな生活にどれだけの慰安を与えることであろう」⁴³と述べ、ハワイに住む沖縄県系人に支援を訴えている。このように、帰布してからの比嘉の活動は、沖縄で目の当たりにした惨状をハワイの人々に伝え、まず、衣類をはじめとする日々の生活必需品を早急に送る必要性を訴えること、そして、一刻も早く物資を送るための道筋をつけるために、有志の人たちと協議を重ねることであった。

比嘉は、米軍を名誉除隊となった9月16日以降、衣類蒐集活動が終わりを迎える12月16日まで、カウアイ島、オアフ島、モロカイ島、マウイ島など各地で沖縄の惨状を講演し、戦災民救済実施のために有志の人たちと協議する活動を続けていった⁴⁴。

このように、ハワイ各地で救済の必要性を訴え続けた比嘉だが、11月26日に発足した沖縄救済衣類運動委員会の役員、委員、運動の後援者の名簿に彼の名前はない。なぜか。彼自身が名前が出ることを望まなかったからである。彼の「運動経緯と氏名が公表されることによって、もしも衣類の一枚でも集まりが少なかったらいけないという考え」⁴⁵から、新聞社に対して名前を公表しないよう申し

入れている。名前が出ることによって、救済衣類蒐集事業に支障をきたすことを懸念したからであろう。

先に、県人の集まりで救済運動への反対論があったことに触れたが、救済運動を妨害する動きは他にもあったようだ。比嘉は、「残念なことに幾人かの勝ち組、すなわち『必勝会』の連中から私は幾度も脅迫され、また町の売名紳士からも救援運動を邪魔された。…自分以外がすることは例えそれがなんであろうと失敗させようとする売名者の暗躍、⁷⁷防害、人をつかっ⁷⁷ての脅迫などもあった。事実私は沖縄の戦地におけるより以上に身の危険を感じたことを数度体験した」⁴⁶と振り返っており、米兵であった彼の運動に関わるやりにくさが垣間みえる。

「勝ち組」とは、日本の勝利を信じて疑わない人たちのことで、彼らが活動に反対したのは「日本は勝っているのに救済物資など送る必要はない。近日中に日本帝国海軍が真珠湾に堂々と入港して来てハワイを統治するのだと信じていた」⁴⁷からであった。「勝ち組」には沖縄出身者が多く、一世社会では影響力があった⁴⁸ようだ。こうした「勝ち組」はハワイだけでなく、南米の移民の中にも少なからず存在し、ペルー、ブラジルでは救援運動に対して猛烈な反対運動があった⁴⁹という。ハワイでは、猛烈な反対運動は表面化していなかったようだ⁵⁰が、衣類蒐集活動の終盤の12月16日、ハワイ島で講演活動を行っていた比嘉は、「『ホノルル市の運動本部において反動分子による暗躍が激しくなり、衣類募集活動に支障をきたすおそれが生じたから至急帰ってきてくれ』という意味の速達便」⁵¹を受け取っている。その顛末はわからないが、キリスト教連盟主催の蒐集活動には、正面切って反対しづらい情勢となっていたからか、「脅迫した連中も、沖縄救済運動に反対した人も、幾度かの県人有志相談会に全然顔を見せず悪口を言っていた連中も…（最終的には救済運動に：筆者）協力した」⁵²という。

このように、比嘉の沖縄被災民救済運動における役割は、ハワイの人たちに沖縄の惨状を伝え、一人でも多くの方が救済活動に協力してくれるよう訴えかけることであった。比嘉の訴えは、人々の心を動かし、「ウチナンチュだけでなく、ほかの人種民族の人びとを巻き込んで、沖縄救済の大きな車輪が回り始めた」⁵³。比嘉は、まさに救済活動の広告塔の役割を果たしたといえるだろう。

比嘉が、岡野宣勝のいう「越境性」（アメリカと沖縄の間で、移民が持つ多元的な性質を積極的に生かした媒介者としての役割）⁵⁴を発揮したからこそ、この運動は、沖縄県系人以外の人たちからも協力を得られたのでないか。出自や国籍・社会的なカテゴリーを超えた活動は、「勝ち組」をはじめとする反対者の動きをはるかに上回っていたようだ。

IV. 沖縄救済衣類運動の広がり

ここまで、ハワイでの救済衣類運動に関わった宗教関係者や沖縄県人有志の動きと、比嘉太郎の沖縄・ハワイでの活動とが、救済衣類運動の推進力となったことをみてきた。それらはいずれも、運動を推進する側の動向であった。ではなぜこの運動に、多くの人々が協力し、救済品を提供したのだろうか。

本章では、ハワイの人々、とりわけ沖縄県系人が運動をどう受け止めたのか、新聞の報道や、比嘉の講演の何が人々の心を揺さぶったのかを探っていきたい。

ハワイに住む沖縄県系人にとって、新聞以外のメディアが十分に普及していない当時、遠く離れた沖縄に関する情報を入手することは困難であった。その意味では、沖縄から帰ってきた比嘉がもたらす情報は貴重であった。比嘉が帰布した翌日、9月14日の邦字新聞の「只今帰って来ました」⁵⁵には、避難した人たちの写真と沖縄の収容所で作られた詩「収容者の苦（当間嗣英氏作）」が紹介されている。それは次のような詩である。

- 一. 眠る目の苦しさ 哀れ仮枕 外や小夜嵐 思い積む
- 二. かねる打苦さ 何時迄かやゆら 草葉露心 胸ややしはてて
- 三. 枕打ちぬらす 夢の通路や 朝夕馴染の 我家の御側
- 四. 哀りさや浮世 巢なし鳥心 あきよ宿る木ん 紅葉なたみ

この記事は、在留日系人の間で大きな話題⁵⁶になったという。

また、10月9日の紙面「着のみ着のみ、で衣類に困る沖縄民 比嘉太郎一等兵の談片」⁵⁷でも、先の詩の一部と、一刻も早い救済を訴える比嘉の言葉と、「着のみ着儘難を脱れた沖縄人 戦禍が島に迫り来るや着のみ着儘で洞穴へ難を避け」ている人たちの写真が掲載されている。

衣類蒐集活動が始まってからは、活動を推進している団体の広告に、人々の援助を求める文面とともに、被災民の姿を映した写真が掲載されている。「青年諸兄弟よ！一刻も早く一人でも多く起き上がって衣類を募集して下さい。…皆様のご援助に依ってのみ沖縄戦災民は救はれます。一枚でも多く、一刻も早く与えて寒さから救って上げませう」という文面と「3人の少年（うち一人は天秤棒を担いでズボンだけ穿いた裸足）の写真」（12月8日）⁵⁸、写真付きの三つの広告（12月13日）⁵⁹が掲載されている。一つ目は、「布哇在住民一人残らず沖縄戦災で苦しんでいる罹災民をたすけませう」という文面と「野外にいる大勢の戦災民の写真」、二つ目は、「子の寒さはそのまゝ、親の寒さ！一人救えば二人救はれます 皆様の温い古着を着て悦ぶこの笑顔！それを見て喜ぶ親の心を思い浮かべて下さい！……せめてこの冬には間に合はせ度い 一刻も早く一枚でも多く恵んで下さい 皆様の御手が借り度い 温い手で一針縫って下さい！ ぬくもりのある手で荷造りして下

さい」という文面と「ひざ上までのズボン？だけ穿いた裸足の子どもとそれを世話している大人の写真」、三つ目は、「雨の夜、霜の朝、着のみ着のみで震えて居る沖縄の貧しい哀れな人々を救って上げられるときは今です…皆様の温かい同情に訴えます…温かい衣類一枚でも一日も早く与えて下さい」という文面と「10月9日と同じ写真」とが掲載されている。これらからは、衣類蒐集期間中、沖縄戦災民の窮状を訴え、一日でも早く、一枚でも多く衣類が届けられるよう、支援を求める訴求力のある記事が掲載されていることがわかる。

新聞に掲載された、写真という視覚に訴える情報は、比嘉が講演会で語る肉声や新聞記事の文字情報とともに、記事を読んだ人たちに大きなインパクトを与え、「戦禍を受けたひ難民の生活状態談は聞く者をして胸をいたましめ」⁶⁰のものとなった。特に二つの記事に掲載された、「収容者の苦」という収容所の苦しみを詠んだ詩は、聴覚情報に変換され、救済衣類募集運動に大きな役割を果たした。比嘉がマウイ島を訪れたときの歓迎会で、同島の琉球音楽愛好家がこの詩を披露すると、「涙せぬ者はほとんどなく、特に“あきよ宿る木んむみじなたみ”（哀れだ宿る木も紅葉さしたか）の節になるとすすり泣きの声があちらこちらに聞こえた」⁶¹という。このように、この詩は「三味の音にのせられハワイの隅々まで聞こえ、ある人々はこの歌を脚色して劇にし、各地で上演、その収入は全額沖縄救済に寄付された。また幾人かの人々は当間氏のこの歌にこたえ幾つかの歌を作りこれ等の歌も三味の系^{ママ}にのって歌われるようになった」⁶²。

このように、沖縄の戦災民の置かれている状況を知った人々の中には、胸を痛め、涙した人もいた。比嘉のような帰米二世にとって、沖縄戦によって親の故郷や自らが幼少・青年期を過ごした頃に目にしていた風景は一変していた。住んでいた家を追われて、収容所での生活では日々の着るものもままならない。見聞きする沖縄の惨状は、それぞれの記憶の中に刻まれた故郷の心象風景とは余りにも違っていた。

また比嘉は回顧録の中で、ハワイの人々が沖縄の状況を知るようになると、「在布哇同胞は沖縄の親、兄弟、姉妹を救い祖先の地を護ろう。…『親元祖のために』という合言葉をもとに決意を新たにすようになった」⁶³という。比嘉の講演や新聞の紙面、惨状を伝える歌は、沖縄の現状を何とかしたい、救いたいという気持ちを人々に喚起し、救済衣類運動に関わった人々に、送った衣類を着て寒さをしのぎ、喜ぶ人たちの顔を想起させた。それらは人々の心を動かし、運動推進の原動力となっていったのだ。

V. 沖縄救済衣類運動のその後

本章では、救済衣類運動以降に行われた、様々な沖縄救済運動の経緯をみていくなかで、救済衣類運動がそれらの運動に何を残していったのかについて考えていきたい。

1945年12月17日を期限に集められた救済衣類は、海路沖縄に運ばれた。翌年2月26日の新聞には、沖縄救済委員から各商会商店、各教会並びに附属団体、各団体及び個人から、貴重な時間、労力、並びに金銭などの寄贈があったことと、この運動が目的を達成したことへの謝辞が掲載⁶⁴されている。3月以降ハワイには、沖縄から衣類が届いたことへの感謝の便り―「布哇よりの衣類で温々と冬を過ごす 沖縄戦災民より感謝の手紙 山城松夫妻宛 中頭郡勝連村在住の姪からの手紙」(3月21日)⁶⁵、「待ちかねていた 布哇よりの衣類 沖縄で非常に感謝 眞栄城軍曹土産談」⁶⁶、「布哇の皆様有難う 沖縄戦災児童(平安座初等学校)よりお礼状」(7月30日)⁶⁷―が届くようになった。8月1日の紙面では、6月10日付の志喜屋知事からのハワイ救済衣類収受、配給状況報告が掲載⁶⁸されている。

こうして比嘉たちが救済活動を決定してから1年余り、救済衣類運動はひと区切りつき、このあとハワイでは引き続き様々な救済運動が計画されていく。1950年までに設立された沖縄救済の組織と事業は、以下のとおりである。

沖縄救済更生会…1947年発足。沖縄の再建復興には物質的救済より、根本的永久的救済策を講ずることが必要で、「沖縄の救済は先づ教育より」として、機関誌『更生沖縄』を発刊し、人材の養成と高等教育機関としての大学建設をめざした事業⁶⁹を展開した。1948年には沖縄からハワイへの留学生派遣に尽力した⁷⁰。顧問は玉代勢法雲、比嘉仁吉、比嘉静観、大城長亀、照屋孚俊、幹事は湧川清栄であった⁷¹。

ハワイ連合沖縄救済会…1947年12月、沖縄における畜産の復興を念頭に、沖縄に豚を送るために、慈光園で救済会組織の結成を決議。翌年までに寄付金を募り、代表者7人を渡米させ、550頭の優良種豚を購入し、軍の後援を得てオレゴン州ポートランドから沖縄まで輸送した⁷²。会長は金城善助、副会長は山城義雄、会計は嘉数亀助であった⁷³。

沖縄復興ハワイ基督後援会…1948年11月、沖縄のミルク不足を補うための、乳山羊輸送のために発足。翌年、計800頭の乳山羊を輸送した。顧問はボールス博士ら3人、会長は儀間真輝、会計は山城松、安里貞雄ら5人であった⁷⁴。

レプタ会…沖縄への衣類の輸送後、救世軍婦人会を中心に1946年7月に組織され、沖縄の孤児院、養老院、その他特殊戦災者への救済活動を行った⁷⁵。衣類、書籍、文房具、裁縫ミシン、布などを沖縄に送った。顧問はボールス博士他2人、

役員は創立者の山城みさをはじめ、16人（うち女性14人）であった⁷⁶。

沖縄医療救済連盟…1948年1月、医薬品を送る目的で組織。同年3月、約1万ドルの医薬品を輸送。世話人は山城松十ら13人、この中には安里貞雄の名前もある⁷⁷。

ハワイ沖縄復興連盟…1950年3月、今後沖縄の救済・復興には在留沖縄県人が一致協力する必要があるという認識のもと、沖縄相撲協会の島袋清らの斡旋で、既存沖縄救済団体を統一した組織として発足。各既存団体はそのまま存続したが、それら既存団体から代議員を選出し、事業運営にあたった⁷⁸。

このほか、救済衣類運動がきっかけとなって1946年1月に結成された、沖縄移民二世青年会（フイ・マカアラ会）が主催して、野菜種子・漁具輸送運動が行われた⁷⁹。フイ・マカアラ会は、県人有志の後援を得て、「戦災沖縄復興運動」と銘打って寄付を呼び掛け、野菜種子・漁具を購入して沖縄へ送った⁸⁰。また、沖縄で学ぶ八万人余りの学童に学用品を購入して送る学用品輸送運動、薬品輸送運動も行った。前者では仲真音楽会が、後者では宮城音楽会が、演芸会を主催してその資金を募っている⁸¹。後者の薬品輸送運動には、沖縄における豚コレラの蔓延を防止する目的もあり、救済衣類運動や野菜種子・漁具輸送運動に関わった有志が中心となって寄付を募った⁸²。

これらの運動が、救済衣類運動から受け継いだものはいったい何だったのだろうか。救済衣類運動によって生まれた沖縄救済の動きは一過性に終わらず、継続していたことがわかる。それぞれの運動の活動の場や、運動を主導したメンバーを眺めてみると、救済運動の持続性がよくわかる。

例えば、様々な沖縄救済会の会合が行われた本願寺慈光園は、救済衣類運動の衣類蒐集場所の一つであり、蒐集期間中たびたび衣類の提供を訴える広告主であった。そこでは、「第一世二世の男女有志が毎晩数十人集まって、諸方から集まってくる種々様々な救済品の整理から荷造り発送に至る迄、真に涙ぐましい大活動」⁸³があったという。

また、人物に目を転じると、救済衣類運動委員会の役員や運動の推進に協力したメンバーが、その後の救済運動においても中心的な役割を担っていたことがわかる。救済衣類運動において実質的に委員長の役割を担っていたポールズ博士は、沖縄復興ハワイ基督後援会、レプタ会の顧問。1945年4月、沖縄救済運動開始に賛同し、同委員会の会計であった安里貞雄は、沖縄復興ハワイ基督後援会の会計、沖縄医療救済連盟の顧問。マカレー本願寺の開教使として衣類蒐集活動を担った玉代勢法雲は、沖縄救済更生会の役員。また、同委員会の委員の一人であった金城善助は、ハワイ連合沖縄救済会の会長。さらに、同委員会の活動に若手グループの代表者として活動に協力した山城義雄は、ハワイ連合沖縄救済会の副会長で、

四人ともハワイ沖繩復興連盟の各団体代表者の中に名を連ねている。また、先に述べたフィ・マカアラは、救済衣類運動をきっかけに、様々な救済運動を展開していった⁸⁴。このように、救済衣類運動は沖繩県系人同士の結束を促し、さらなる救済運動の担い手を生んでいったことがわかる。その意味で、救済衣類運動は、ハワイの沖繩県系人同士のつながりをより強固なものにしていったといえる。

さらに注目に値するのは、救済運動への協力を促す活動である。運動の推進に何よりも必要であったのは、救済の趣旨を理解してもらい、助けたい、協力したいという機運を醸成することであった。そのうえで、現実的な課題として、救済品を収集・輸送するために必要な人的労力、時間、資金を確保する方法を考える必要があった。人々の同情に訴えるだけでは限界がある。「今日も沖繩救済の金集めが来た、昨日も来た。…一体、沖繩救済会は幾つあるのだ。そう入替わり来て貰っては此方も困る…」⁸⁵にみられるような、団体ごとに寄付を求める動きは、救済運動の継続にはプラスにはならない。あくまで自発的に救済運動に参画、協力してもらう方策でなくてはならなかった。

そこで、重要な役割を果たしたのが芸能であった。救済衣類運動の際、沖繩の収容所にいる人が作った「収容者の苦」という詩は、ハワイでは三味の音色として人々に届き、それを聞いた人々は、故郷への郷愁を感じ、故郷の惨状に涙し、救済衣類運動に協力していった。郷土への想起を誘うことができる芸能は、ハワイに住む沖繩の人たちの心を揺り動かし、救済運動を推進する原動力の一つとなったのである。様々な救済活動が実施されるにつれ、人々の自発的な協力や寄付につながる方法として、芸能が重要な役割を担うことになった。

いくつか例をあげると、仲真音楽会は八万学童救援事業として学用品を送る募金を集めるために、県人会有志の後援で大演芸会を開催した。演目は伊江島の男性と辺土名の女性の悲しい恋物語を描いた琉球大悲劇「伊江島ローマンス」⁸⁶であった。この演芸会は盛況で予想以上の寄付金が集まった⁸⁷という。また、宮城音楽会はハワイ連合沖繩救済会、仲真音楽会後援の下、薬品、医療器具購入基金募集琉球大演芸大会を開催した⁸⁸。演目は、復興にいそしむ郷土の人々に救いの手をさしのべるハワイの人々の同胞愛をテーマにした「沖繩の曙」で、焼き払われた首里の破壊された教会堂を背景に、薬がなくて瀕死の母を拝仏によって救おうとする少女と、その姿をみてハワイの人々に救いを求める沖繩系二世兵士を中心に展開する物語であった⁸⁹。この演芸会も成功裡に終わった⁹⁰。

このように、何らかのイベントを開催して、その収益を救済品の購入費用に充当する方法が、救済運動のなかでしばしば行われた。それらは、ハワイ在住の沖繩県系人に故郷沖繩の懐かしい風景を思い起こさせ、沖繩の惨状の解消に向けて、同胞として協力したいという気持ち呼び起こし、ハワイに住む多くの沖繩一世・

二世の同胞としての意識やつながりを強めていくきっかけともなったのだ。

VI. おわりに

以上、本稿では沖縄救済衣類運動に注目し、運動の経緯を見ていく中で、その運動の推進力となったのは何であったのかについて考えてきた。救済品を沖縄に届けるという救済運動の目的を達成するには、何よりも救済に向けて、人々の心を動かすことが重要であった。そして、米国との戦争の発端となった真珠湾攻撃の舞台となったハワイの地で、沖縄を救済する試みの実現には、両者の懸け橋となる人物が必要であった。その役割を担ったのが、沖縄移民二世で米国軍人の比嘉太郎であった。救済衣類運動の経緯をみると、米軍関係者の協力を得るうえで、彼の存在は大きかった。また、帰布後、彼が沖縄戦災民の惨状を直接ハワイの人たちに語った言葉は、沖縄県系人のみならず、宗教関係者の心に響いたといえるだろう。彼が新聞の紙面で紹介した、戦災民の状況をうたった詩は、彼のハワイ各地行脚とともに広がり、沖縄への郷愁と未来の安寧を求める気持ちを呼び起こしていった。

救済衣類運動とそれに続く救済運動においても、人々の故郷への想いを喚起する取り組みが継承され、故郷の同胞を助けたいと願う人たちをつないでいった。救済衣類運動と、それに続く救済運動の進め方からは、以下のことがわかる。1点目は、出自や社会的カテゴリーを超えた横断的な運動の展開がなされたこと、2点目は、歌や音楽といった文化的資源やメディアの活用による同胞意識が喚起されたことである。それらの点が、沖縄県系人の主体的行動を引き出し、同胞としてのまとまりを生み出していったと考えられる。

最後に、救済衣類を受け取った人がハワイに招かれ、催された歓迎会⁹¹でのスピーチの一部を紹介する。この会には、救済衣類の集積所であった慈光園で、衣類送りのボランティアに参加していた人たちもいた。救済衣類を受け取った人は、スピーチの途中から涙声で、途切れ途切れになりながらも、次のように語ったという。

「子供のころ青空教室で、ハワイから送られてきた鉛筆、ノートを使って勉強しましたが、着ているのも、またハワイから送られたものでした。私の現在があるのは、本当にハワイのお蔭…本当にありがとうございました」。

ハワイの沖縄県系人の故郷を想う心が集めた救済衣類は、沖縄の復興を願う人々の希望をものせて海を渡り、沖縄へと運ばれていった。その願いは、衣類を受け取った人々に確かに届いていたのである。

注

- 1 本稿は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2129の支援を受けたものである。
- 2 本稿では、沖縄から海外に移住した人たちとその子孫のことを「沖縄県系人」とする。
- 3 島田法子『戦争と移民の社会史—ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争—』（現代史料出版、2004）、227。
- 4 白水繁彦『エスニック文化の社会学 コミュニティ・リーダー・メディア』（日本評論社、1998）、103。
- 5 白水繁彦『海外ウチナンチュ活動家の誕生 民族文化主義の実践』（御茶の水書房、2018）、17-19。
- 6 第2回移民の手記の中に、「月給十八弗（三十六円）なれど一月なり二月なり当時の事情に馴れ次第受合仕事を致せば優に一日二円二三銭以上は得らるゝ見込みに候食料及小使金合して十四五円を要するなれば目下は月二十円の外送金出来ざる筈に候…」、『琉球新報』1903.5.13）とある。
- 7 1931年を例にとれば、海外在留者による送金額が県の歳入総額に占める割合は31.7%、ハワイからの送金額は、沖縄移民がいる国・地域の中では最も多く、県の歳入総額の10.3%を占めている（石川友紀「昭和戦前期海外沖縄県出身移民からの送金の実態」『沖縄地理』第15号（沖縄地理学会、2015）、85-88）。
- 8 島田『戦争と移民の社会史』、228。
- 9 下嶋哲朗『豚と沖縄独立』（未来社、1997）、64-65。
- 10 島田『戦争と移民の社会史』、231。
- 11 同上、197。
- 12 同上。
- 13 川手晴雄『私の父はノーノーボーイだった 日系人強制収容に抵抗した父の記録』（青山ライフ出版、2010）。
- 14 秋山かおり『ハワイ日系人の強制収容史—太平洋戦争と抑留所の変遷』（彩流社、2020）、176-177。
- 15 1945年11月22日、沖縄人連盟創立大会の場で決議された。請願書の原文は、比嘉春潮編『沖縄人聯盟 昭和20年11月第1級（仮題）』（1995）。
- 16 湧川清栄は、ハワイでの労働運動に活躍した人の中に沖縄県系人が多く、救済運動においても指導力を発揮しようとした（湧川清栄「ハワイ沖縄県人の思想活動抄史」『湧川清栄遺稿・追悼文集刊行委員会編『アメリカと日本の架け橋・湧川清栄—ハワイに生きた異色のウチナンチュ』（ニライ社、2000年）、107。初出は『季刊沖縄』創刊号（1979））と述べている。港湾関係の労働組合など、左翼系の組合の救済運動への関わりも興味深いだが、本稿では救済衣類運動を中心に論じていきたい。
- 17 例えば、北米は1946年6月（比嘉太郎編著『移民は生きる』（日米時報社、1974）、123）、ペルーは1946年11月（同上、128）、ブラジルは1947年4月（同上、128）、カナダは1947年9月（同上、152）、メキシコは1948年1月（同上、144）に救済の組織が発足している。ボリビアは1949年1月に北米に救援金（同上、154-155）、アルゼンチンは1947年に第1回救援品を送っている（同上、156）。
- 18 島田『戦争と移民の社会史』、239-251。
- 19 安里貞雄『ハワイに於ける沖縄被服救済運動の動機とその記録』（布哇タイムス社、1964）、12-15。
- 20 1916年、ハワイ生まれ。幼少期に沖縄の祖父母のもとに預けられて育つ。小学校卒業後、大阪で働いた後、一度ハワイに戻り、父親の手伝いをしていた（比嘉太郎著『ある二世の轍』（ハワイ報知社、1982）。
- 21 比嘉『ある二世の轍』、192。
- 22 安里『ハワイに於ける沖縄被服救済運動の動機とその記録』、12-13。
- 23 「熱誠に燃えた 沖縄各村民代表会」『Hawaii Times』1945.11.30、7。

- なお、紙面の引用にあたっては、旧字体は新字体に改めた（以下、同様）。
- 24 安里貞雄「ハワイにおける沖縄衣服救済運動の動機とその記録」『移民は生きる』, 187-188.
 - 25 同上, 188.
 - 26 「沖縄戦災民へ衣類募集を開始」『Hawaii Times』1945. 11. 30, 7.
 - 27 比嘉武信編『来布五十年記念 布哇沖縄縣人寫真帳』（1951）.
 - 28 仲嶺真助『仲嶺真助 自伝 沖縄系帰米二世九十年の生涯を顧みて』（新報出版, 2002）, 80-81.
 - 29 白水『海外ウチナンチュ活動家の誕生』, 14-15.
 - 30 比嘉『ある二世の轍』, 187.
 - 31 同上.
 - 32 同上, 91.
 - 33 同上, 196.
 - 34 同上, 91-92.
 - 35 同上, 187.
 - 36 同上.
 - 37 同上, 188.
 - 38 同上, 188-189.
 - 39 同上, 189.
 - 40 同上, 189-190.
 - 41 同上, 194.
 - 42 『Hawaii Times』1945. 9. 14, 6;1945. 10. 9, 8.
 - 43 『Hawaii Times』1945. 10. 9, 8
 - 44 安里『ハワイに於ける沖縄被服救済運動の動機とその記録』, 12.
 - 45 比嘉『ある二世の轍』, 194.
 - 46 同上, 191.
 - 47 同上.
 - 48 島田は、ハワイ全島で一世の1割位が一時的にせよ必勝会の集まりに参加していたと推計している（島田『戦争と移民の社会史』203-204）。
 - 49 ベルーでは「戦勝組」、ブラジルでは「勝った組」の猛烈な反対がある中で、沖縄救援のための組織が発足しているという（比嘉『移民は生きる』, 128）。
 - 50 ハワイの日報紙では、救済衣類運動の期間中、「勝ち組」もしくは「必勝会」の動向についての記事は、管見の範囲では見当たらなかった。
 - 51 比嘉『ある二世の轍』, 195.
 - 52 同上.
 - 53 アキラ・サキマのスピーチ（白水『海外ウチナンチュ活動家の誕生』, 102.
 - 54 岡野宣勝「占領者被占領者のはざまを生きる難民—アメリカの沖縄統治策とハワイのオキナワ人—」『移民研究年報』第13号（日本移民学会, 2007）, 4-5.
 - 55 『Hawaii Times』1945. 9. 14, 6.
 - 56 比嘉『ある二世の轍』, 190-191.
 - 57 『Hawaii Times』1945. 10. 9, 8.
 - 58 『Hawaii Times』1945. 12. 8, 8.
 - 59 『Hawaii Times』1945. 12. 13, 6;8;9.
 - 60 『Hawaii Times』1945. 10. 9, 8.
 - 61 比嘉『ある二世の轍』, 192.
 - 62 同上, 191.
 - 63 同上.
 - 64 『Hawaii Times』1946. 2. 26, 6.

- 65 『Hawaii Times』 1946. 3. 21, 8.
- 66 『Hawaii Times』 1946. 5. 4, 4.
- 67 『Hawaii Times』 1946. 7. 30, 6.
- 68 『Hawaii Times』 1946. 8. 1, 10.
- 69 玉代勢法雲「ハワイにおける沖縄救済事業」『移民は生きる』, 203.
- 70 同上, 206.
- 71 同上, 207.
- 72 同上, 207-208.
- 73 同上, 208-209.
- 74 同上, 209-210.
- 75 比嘉『来布五十年記念 布哇沖縄縣人寫真帳』.
- 76 玉代勢「ハワイにおける沖縄救済事業」, 210-211.
- 77 同上, 211.
- 78 同上, 211-212.
- 79 比嘉『来布五十年記念 布哇沖縄縣人寫真帳』.
- 80 同上.
- 81 同上.
- 82 同上.
- 83 玉代勢「ハワイにおける沖縄救済事業」, 202.
- 84 比嘉武信編著『ハワイ琉球芸能誌』ハワイ報知社, 276.
- 85 同上, 273.
- 86 『Hawaii Times』 1947. 1. 27, 6; 『Hawaii Times』 1947. 1. 30, 6; 『Hawaii Times』 1947. 2. 7, 7.
- 87 外間勝美「沖縄救援こぼれ話」『移民は生きる』, 213.
- 88 『Hawaii Times』 1948. 7. 29, 6.
- 89 外間「沖縄救援こぼれ話」, 215.
- 90 『Hawaii Times』 1948. 9. 24, 7.
- 91 仲嶺『仲嶺真助 自伝』, 81.

Abstract

The Okinawa Clothing Relief Drive in Hawaii

Akihiro KITANI

This paper aims to clarify the background of how the Okinawa relief movement was envisioned and developed, focusing on the clothing relief drive from Hawaii to Okinawa, which was the beginning of the Okinawa relief movement in Hawaii after World War II.

In Hawaii, where overseas immigration from Okinawa began, the Okinawa Clothing Relief Drive Committee was organized on November 29, 1945, to help the impoverished Okinawans in their plight due to the Battle of Okinawa. Hawaii was the first to establish such a relief organization among the countries and regions with Okinawan immigrants. The movement spread to all islands of Hawaii, and after December 1945, clothing relief was collected and delivered to Okinawa. After this, various Okinawa relief organizations were established in Hawaii through 1950 and promoted relief activities to help Okinawa's living, education, and medical needs.

This paper examines the movement process based on records of people involved in the clothing relief drive to Okinawa and newspaper articles of the time. In addition, it also explores why the movement spread through the activities of Taro Higa, who can be said to have been a critical person in this movement. Furthermore, it investigates how the clothing relief drive from Hawaii to Okinawa led to the following relief movements.

At first, there was concern that the movement would harm the Japanese community in Hawaii, as Hawaii's religious community took the lead as the promoters of the movement, unfounded. According to newspaper articles of that time, the movement widely spread throughout the islands of Hawaii and among people of various nationalities and collected many clothing items quickly. Above this was not only due to the efforts of people of Okinawan descent who

wished to help the Okinawan people but also to the cooperation of religious and other Hawaiian people.

Taro Higa, a second-generation Okinawan immigrant and U.S. serviceman who served in the Battle of Okinawa, played a significant role in the realization of the attempt to relieve Okinawa from Hawaii. After returning to Hawaii, he shared the terrible scenes he had witnessed in Okinawa and appealed to as many people as possible to cooperate with relief activities. His reports of the tragic scenes he witnessed in Okinawa moved the hearts of those who saw and heard them. In particular, they stimulated a sense of nostalgia among those of Okinawan descent living in Hawaii for their homeland of Okinawa.

The bearers of the clothing relief drive also continued to promote the relief movement in the following years. Later, the relief movement also continued to evoke people's feelings for their hometowns, connecting people who wished to help their hometowns. In this process, the performing arts played a significant role.

Finally, this paper concludes that the Okinawa relief movement in Hawaii provided an opportunity to strengthen the sense of brotherhood, connectivity, and unity among people of Okinawan descent in Hawaii.